

## 芹が谷やまゆり園 津久井やまゆり園 意思決定支援プロジェクト 「支援はコチラから～意思決定の方法論を学ぶ～」

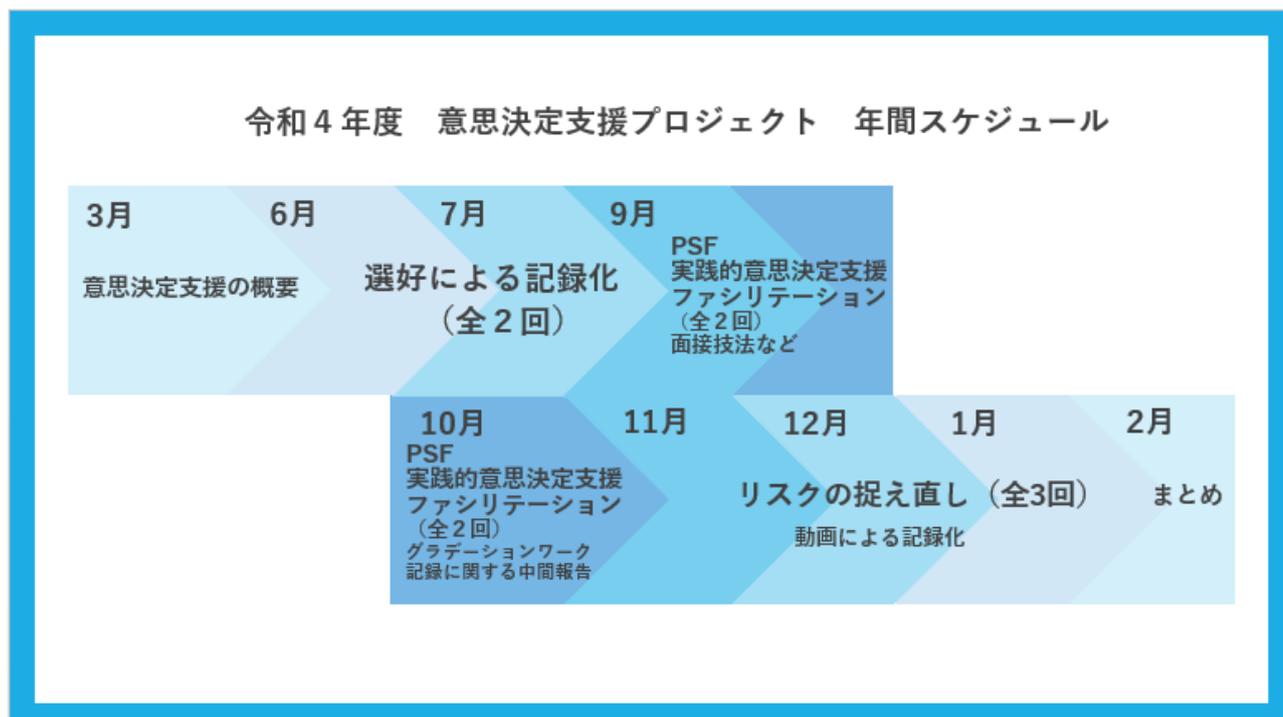
津久井やまゆり園 地域サービス課  
小林 智  
石井 雄祐

### 1.SDM-Japan と芹が谷やまゆり園との関わりの概要

令和 4 年度 4 月より意思決定支援プロジェクトを園内にて立ち上げ、1年間を通じ研修として、一般社団法人日本意思決定支援ネットワーク SDM-Japan との年間契約を締結し、一年を通して月に一回程度、SDM-Japan 講師による、支援を集中的により多く必要な方への意思決定支援プロセスの方法論や技法の実践アセスメントを行った。

その研修内容については、意思決定支援の概要、選好に関する記録化、リスクの捉え直し、PSF 実践的意思決定支援ファシリテーションの面接技法など、各セクションよりモデルのケースを選出し、その方々へ集中的に習得した意思決定支援の実践を行った。その中でも記録化に関しては、特に時間をかけて研修を行った。





## 研修内容

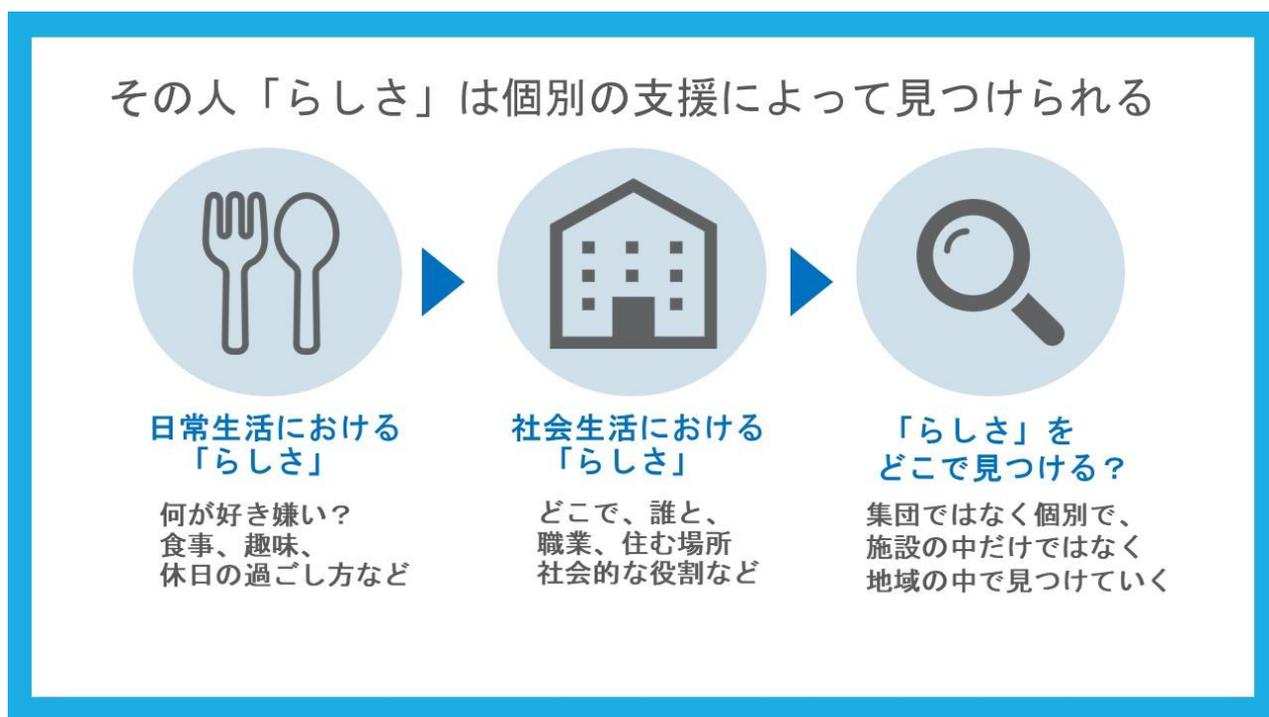
- ・意思決定支援の概要
- ・選好の収集と記録化に関する研修
- ・リスクの捉え直し研修
- ・実践的意思決定支援ファシリテーション研修

## 2.その人らしさとは

意思決定支援って何であるか？担当の利用者さんの「らしい」とはどのようなものか？その人「らしい」ところが想像出来るだろうか？難しいのではないか？想像したその人「らしい」とは、なんだか「特徴」となっていないだろうか？ではその「らしい」や「らしさ」とは、どのように見つけていくのだろうか？「らしい」とか「らしさ」というのは、その人を総合的に見て「らしい」となるので、多くの「らしさ」の材料が必要となってくる。ではどのように、その「らしさ」を見つけていくのか？

日常生活における「らしさ」とは、何が好き？嫌い？や食事や趣味など、どちらかという小さな「らしさ」である。次はもう少し大きな「らしさ」という所で、社会生活における「らしさ」、どこで？誰と？住むか？どんな職業？となどの少し大きな「らしさ」である。

ではどのようにそういった「らしさ」を見つけるのか？それは施設の中で集団として生活すると、必然的に選択の機会はやはり少なくなることから、個別による選択機会の提供が大切だと言われている。ただ気を付けなくてはならないのがジュースの購入やおやつを選択ばかりが行われても、その人「らしさ」というものの材料になるのだろうか？やはり施設の中の生活における選択場面の提供には限界があり、地域の中における選択の方が多くその人「らしい」材料はあるのではないか？こういったたくさんの「らしさ」が積み重なることで、その人「らしさ」というものが形づいてくると思われる。



その人「らしさ」を見つけるキーワード「選好を知る」と「自己効力感」という言葉である。選好を知るとは、その人がどうやって好きなものを選ぶのかを知ること、自己効力感とは、本来は自分の力を信じられる気持ちであるが、ここでは、本人と支援者とが関わることで信頼感が生まれ、伝えてもいい、伝えたいという気持ちが高まっていくこととする。

そして選好に沿った関わり、すなわちご本人のニーズに合った支援を支援者が行っている状態であると、自分の願いが叶うことで達成感が生まれ、自己効力感が高まり、意思表示が強くなってくる。

しかしながら、この説明で誤解して欲しくないのは、このように本人のニーズに対して対応を続けて支援を行っていると、ご本人が「わがまま」になってしまうからやめた方がいい、という意見が聞かれるが、で

は施設に入所されている方が、他にどこでわがままになれるのか？と個人的には考えてしまう。意思決定支援の性質上、支援を続けて行われていれば、利用者にわがままになってもらうのが一つのポイントではないかと考える。

### 3.選好の記録化

まずは、一つ目の事例入門編として、生活場面でのおやつ記録である。以前は事象をありのままに記載し客観的な記録を書くことが大切だと教わり、私自身もそのような記録を記載していた。しかしながら、SDM-Japan の研修を受け、記録内容を【】を使って項目化し、選好について意識した記録を行うと、「客観的主観」という言葉があるのかは分からないが、客観的に見るだけではなく利用者さんの様子や動きに対しての考察を合わせて記録をするようになった。スライドの場面においては、口を開く、目を見開くといった記載がある所がポイントである。続いて、利用者さんとの外出場面での記録の変化である。

## おやつ提供の場面における記録の変化



以前個別に購入していたポテトチップスやジュースをおやつ時に提供する。美味しそうに食べていた。食べ終わった後、機嫌良さそうに声を出しながら笑顔で過ごしていた。

記録内容を【】をつかって項目化し、「選好」について意識した記録をすると...

#### 【意思決定支援記録】

【事柄】ポテトチップが好き

#### 【本人の反応】

おやつの際、ご本人購入のポテトチップを担当が渡すと、目を見開いて大きな口を開けて食べられている。

#### 【考察】

まばたきもせずに食べられていた。ポテトチップが大好きと思われる。

本人の望む生活は以下の表題の通りである。

Aさんは50歳男性で、手帳はA1の判定、区分6である。思いを伝えたいことはたくさんあるけど、伝えることが苦手な方。先ほどと同じようにSDM-Japanの研修を受けての外出場面の記録となるが、項目があることで事象時の場面がイメージしやすい。そしてこのような考察が複数集まると、Aさんって〇〇な人かも？〇〇が好きかも？といった共通の話題が出来、ちょっとしたきっかけから本人の望む生活について意識が出来るようになるのではないかと感じている。

## 本人の望む生活への記録例

「ドライブや外出、レストランで美味しい食事をしたい!」

Aさん 50歳 A1 区分：6  
 思いを伝えたいことは**たくさんある**が、伝えることが**苦手**な方。



【意思決定支援記録】（快・楽しみ）
【事柄】余暇外出（マクドナルド）、社会資源との関り
【本人の反応】
マクドナルドのロゴを見せながら、ご本人へ「マクドナルドへ行きませんか。」と声掛けを行なう。寮から出ないなど嫌がる様子はなく、車に向かう際も、足取りは早い。現地にて、メニュー表を見せるとダブルチーズバーガーのセットを指さすため、そのセットを購入する。近隣の公園でダブルチーズバーガーのセットを喫食した。食事をしている際は、表情良く、笑顔が多くみられていた。帰寮後も笑顔が多くみられていた。
【考察】
マクドナルドにお誘いをした際には嫌がる様子がなかったことや、車内でも多く笑顔が見られていたことから、外食やドライブ自体が好きなのではないかと推測される。また、ご本人が外出したいといった思いを外出専用のリュックや帽子を本人が持ち職員に提示することで、ご本人から外出に対しての表出も増えるのではないかと推測される。

私自身、この取り組みを始めてみて、今まではどの様なポイントを意識して書けば良いのか分からず、あった事象を記載し続け、1つの記録に 30 分以上かかる時もあったが、この記録時間の計算では1ユニット 10 人だとすると、超勤が当たり前になってしまい、現場の職員としては恐ろしいこととなってしまふ。とはいっても記録が得意な人、苦手な人はいるので、あくまでも共有したいことを記録に残すと行った意識が大切である。そして繰り返し書いていくことで、スピードも要点もまとめやすくなったという職員が多かったことも事実である。

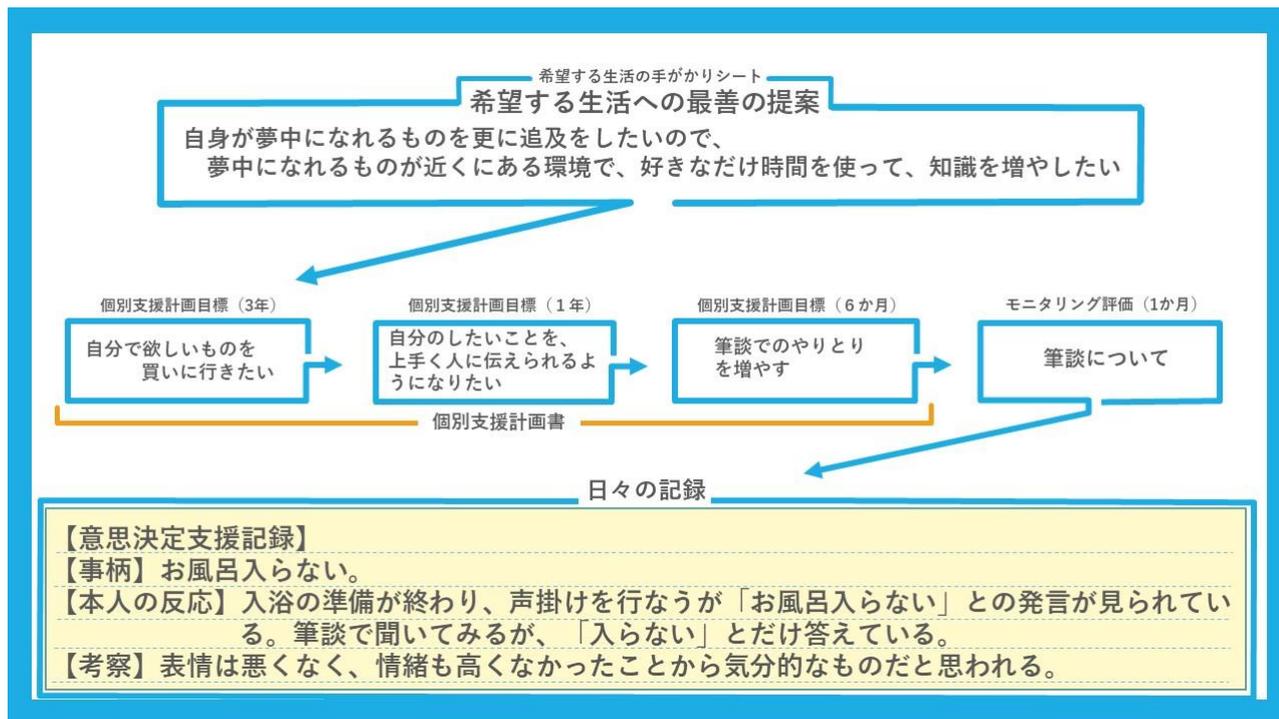
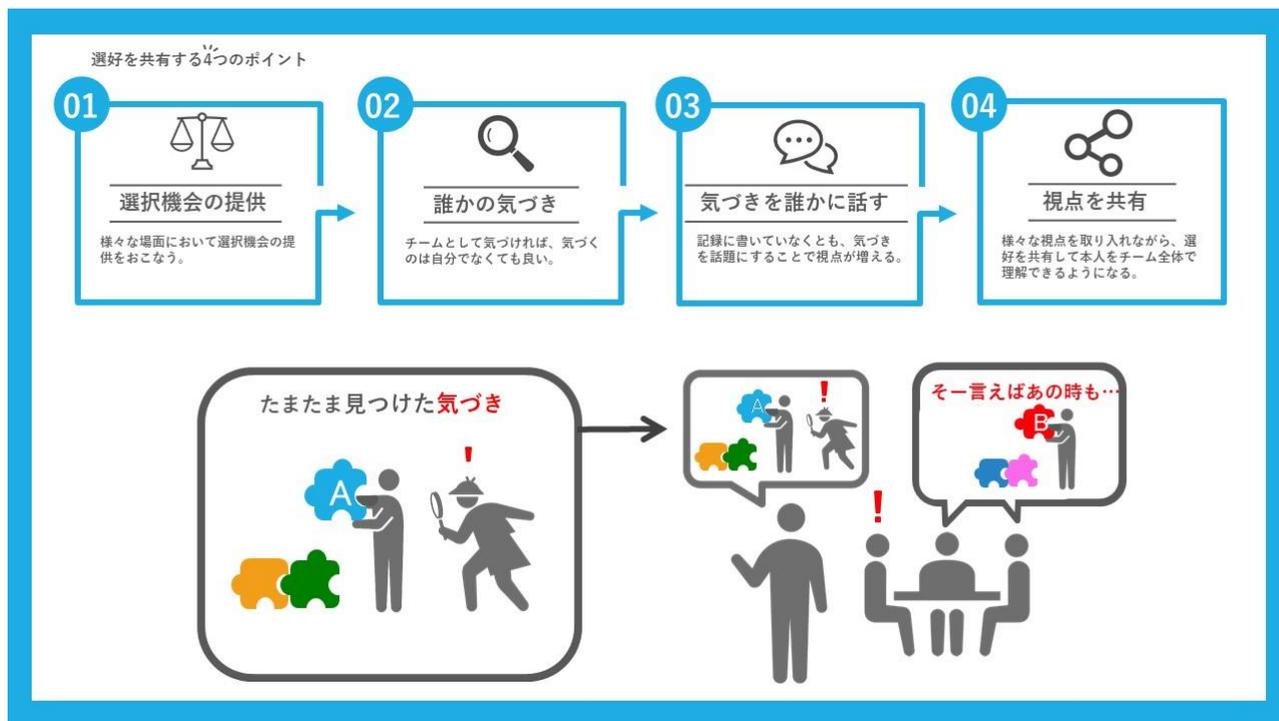
「選好」についての、記録の書き方を知ったことで、どこを伝えたいのか、「〇〇な部分を他の職員にも知って欲しい。」と言った「気づき」について整理が付けられ、記録の時間の短縮や「読む」側も読みやすい、その気づきを共有しやすい記録が出来るようになった。また、画面いっぱいの文字数がある記録を読まなければならない場合には、そっと記録の画面を閉じてしまうこともあると思われる。このように記録をたくさん残しても「せつかく気づいたその気付き」が他支援者に伝わらないともったいないと思われる。

また、この記録の書き方を意識した周りの変化としては、一人がやりはじめ、面白そうな場面や記録が残っていると、それを読んだ職員が真似をして少しずつ「選好」を意識した記録が増えてきた。そのような記録が増え始めると、記録だけではなく立ち話的に「昨日、Aさん〇〇なことがあって楽しそうだったよ。」といった会話も少しずつ増えていた。

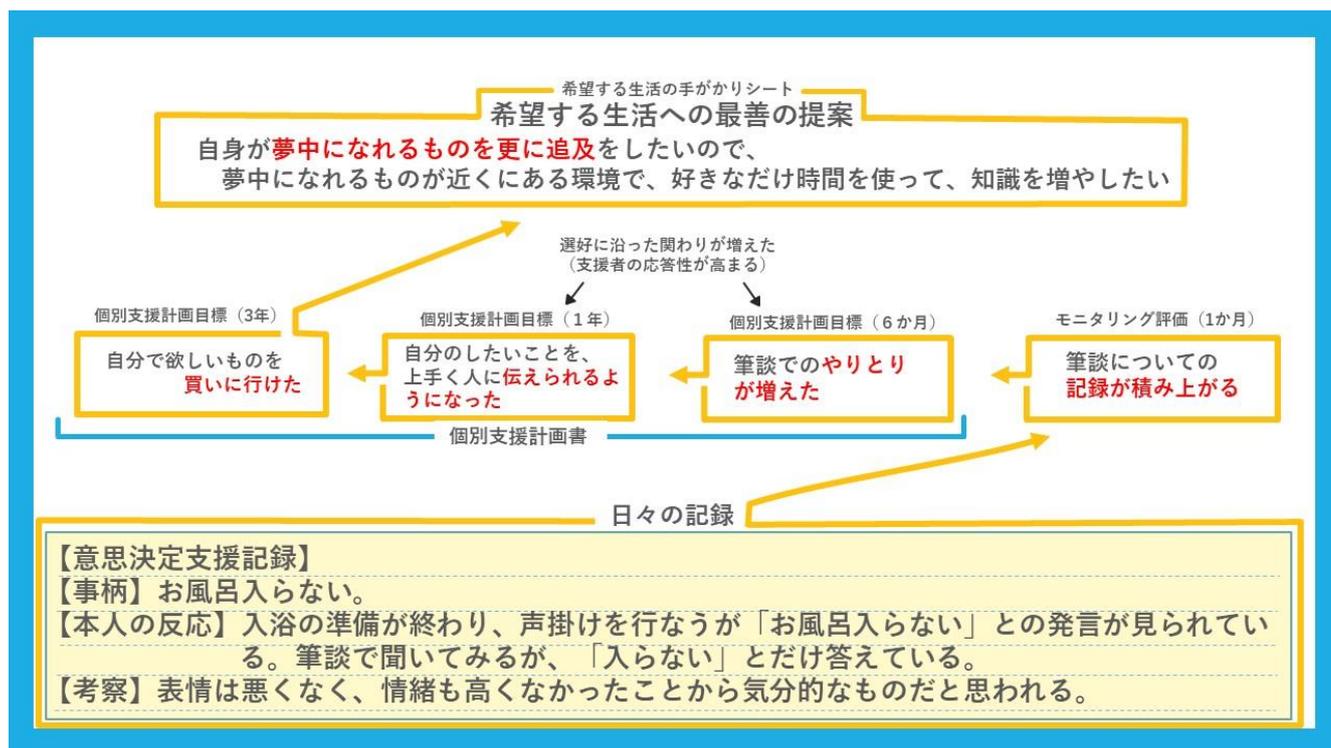
そして、全体を通して見た時に、初めは「やらされている感。」が強かった雰囲気も次第に「意外と面白い」「やってみよう。」と変化し、自然に上記の様な記録が増えてきたと感じる。全体的にやってみるということが大切なことだと感じた。

また記録の目的としては、気付きの共有が大切である。現場でその日その場所においてみんなで話せれば良いが、中々シフト勤務だと難しいのが現実である。そのための手段としての記録があるが、決して、書くことだけが目的ではない。

令和 4 年度 職員研究活動支援事業④



気づきを共有するのが記録であり、集まった記録は何に繋がっているのかということについての説明である。上記図の一番上の「希望する生活への最善の提案」という項目があるが、これは津久井・芹が谷における再生基本構想において作成した、ヒアリングシートや希望する生活の手がかりシートから導き出した最善の提案のことを指している。簡単に説明すると、障害や健康に関係なく本人がやりたいこと。特に好きや嫌い・意思決定の力等を津久井やまゆり園の独自のアセスメント表にまとめ整理したものが手掛かりシートである。



これを現時点でのご本人の目指す希望する生活と捉えて、そこからバックキャスト(簡単に言うと未来の目標に対して今やるべきことの考え方)の形で個別支援計画に落として 3 年後、半年、3 ヶ月、1 ヶ月とそれぞれ目標立てを行なっている。

そして 1 ヶ月ごとに行われるモニタリング会議において気づきの記録を元に、評価をしていくためにも日々の記録の蓄積は大切であると言える。この日々の記録が積み重なってくると先ほどとは違い、矢印の形が逆向きになり、最善の提案へと繋がっていく。

#### 4.積み上げた記録の変化について

ここでは SDM-Japan の名川先生と延原氏が意思決定支援プロジェクトの記録の中間報告という形でお示し下さった図を引用して説明していく。こちらは意思決定支援の記録を行う前の令和 3 年 11 月と、意思決定支援の記録化を行なった、令和 4 年 11 月の A さんの記録の変化についてである。

### 記録数の変化と場面 (Aさんの記録より)

R3.1 1月 記録総数 112 件

記録項目	件数	記録された場面
ニーズ	8	希望購入について
生活	45	入浴
日中活動	11	おやつ
健康	1	ジュース購入
情緒	5	散歩
余暇	5	
対人関係	1	
個別支援Ⅱ	28	
食事栄養	2	
受診	6	



R4.1 1月 記録総数 122 件

記録項目	件数	記録された場面
ニーズ	11	希望購入について
生活	34	入浴
日中活動	26	おやつ
健康	4	ジュース購入
情緒	3	散歩
余暇	5	ご本人からの要望
対人関係	1	支援者とのコミュニケーション
個別支援Ⅱ	26	余暇時間の過ごし
食事栄養	4	園内でのイベント
受診	4	
家族関係	3	

(記録の中間報告より 名川・延原・小林, 2022)

まずは記録の数と記録された場面の变化になっている。記録の総数が 112 件から 122 件とそれほど変わってないが、記録された場面において上記図の丸で囲っている項目、「ご本人からの要望」「支援者とのコミュニケーション」「余暇時間の過ごし」「園内でのイベント」などの記録された場面の増加が見られた。このことに関しては、支援者がご本人のニーズやご本人との関わりが増えたことにより場面が増加したことが要因となっていると思われる。

### 記録内容の変化



(記録の中間報告より 名川・延原・小林, 2022)

やはり、おやつを提供というオーソドックスな内容からコミュニケーションやグループホームなど本人への関わりやニーズといった視点が増えたということが伺える。

### 記録の質的な変化



**事実に関する記載の熟達**

- ・ 事実に関する記載をするときに、ご本人の表現に関する記載が洗練されてきている。
- ・ 特別な「問題行動」、「喜びの表現」がみられないとき、穏やかに過ごしているときについても、詳しく記述されることが目立つようになってきた。



**考察の中に、次のプランが記載されることが増えた**

- ・ カード支援への問題点についての提案
- ・ 新規入所利用者へのアセスメントの集積と支援のヒント
- ・ 入浴のタイミング・順番への配慮
- ・ 買い物の方法のアセスメントから、どのような工夫ができるかを検討
- ・ 「ご本人が困りそうな場面ですましく行ったとき」



**同じような内容の記録**

- ・ 同じような内容の記録が増えてきている。
- ・ 生活のルーティーンを大きく変えることは難しいので、同じような記録になることはこれからも続くことが想定される。

(記録の中間報告より 名川・延原・小林, 2022)

そして記録の質的な変化である。事実に関する記載の熟達とある。ご本人の表現に関する記載が洗練されてきていることや、穏やかに過ごさせているときについても、詳しく記述されることが目立つようになってきた。考察の中に、次のプランが記載されることが増えた。また、記録を書いた支援者が支援を行なって気づいたことやこうしたらもっとよくなるといった提案が記載されるようになった。そして、同じような内容の記録、様々な記録のバリエーションが増えたと言っても、施設で暮らす中でなかなか変化するものもないので、新たな視点が増えても増え続けることは難しく、ある一定のラインで同じ内容の記録が並んでくるのは致し方ないことだと考えられる。

### 記録化に関する課題について



記録が**目的化**してしまう

▼



気付きを**ネタ**に盛り上がる



記録を書くことに**スキル**を要する

▼



視点を大切にくり返し書いて**鍛える**



記録時間が**少ない**

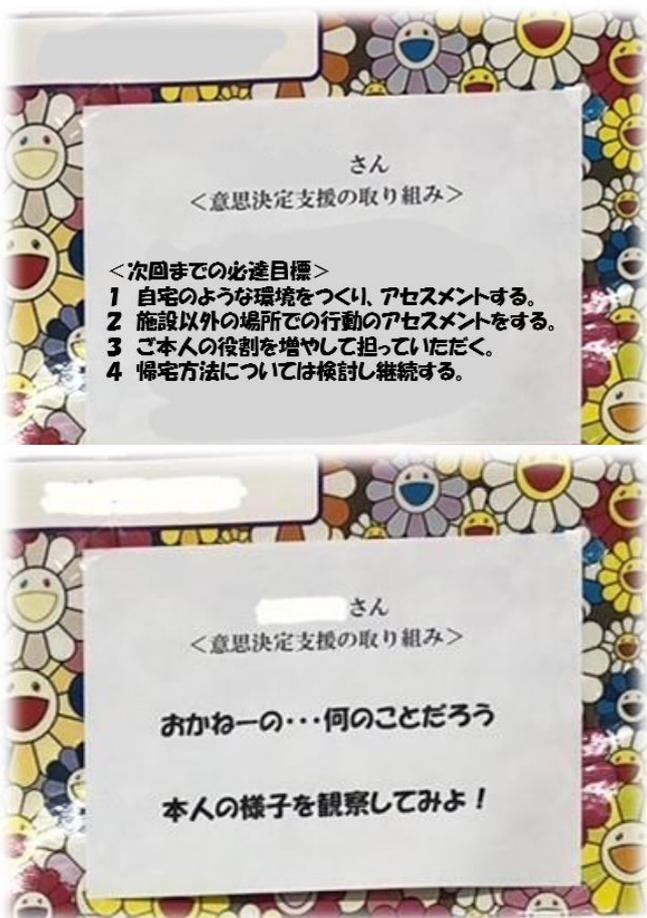
▼



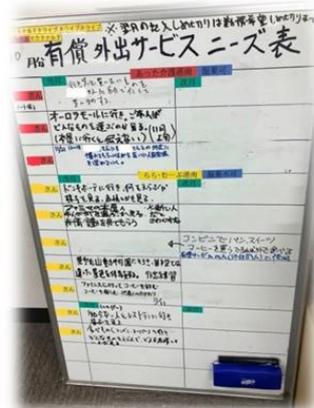
出来る**範囲**で始める

## 5.その他の取組み実践について

- (1) 意思決定支援の取組みの見える化  
普段ご本人とどう関わって欲しいかを分かりやすい形で支援者に提示する取組みとして、スタッフルーム内の見やすい場所にそれぞれ関わりのポイントを掲示した。
- (2) 気になる 記録  
毎月の重点記録の他にもグループ内で記録を回覧して、それぞれ気になった記録をピックアップして会議の場等で話しあった。
- (3) 有償ガイドヘルパーを利用した目的別外出  
土日以外でも外出の機会を提供するため、外部事業所とそれぞれ利用者さんが契約を行って、月に一回程度の目的別外出を実施した。またガイドナースとの契約も行って、医療的に心配な方も安心して外出することができた。
- (4) お友達プロジェクト  
入所施設で暮らしている方の意思決定を促進する取組みとして、お友達のような関係、対等な関係としての交流を目的としたプロジェクト。
- (5) 外部事業所への通所 体験  
入所している日中活動内容では、生活介護におけるご本人のニーズを満たしていないことを考慮し、外部の生活介護の利用を視野に入れた見学や体験を実施した。



外出のニーズ表→



←山下公園外出



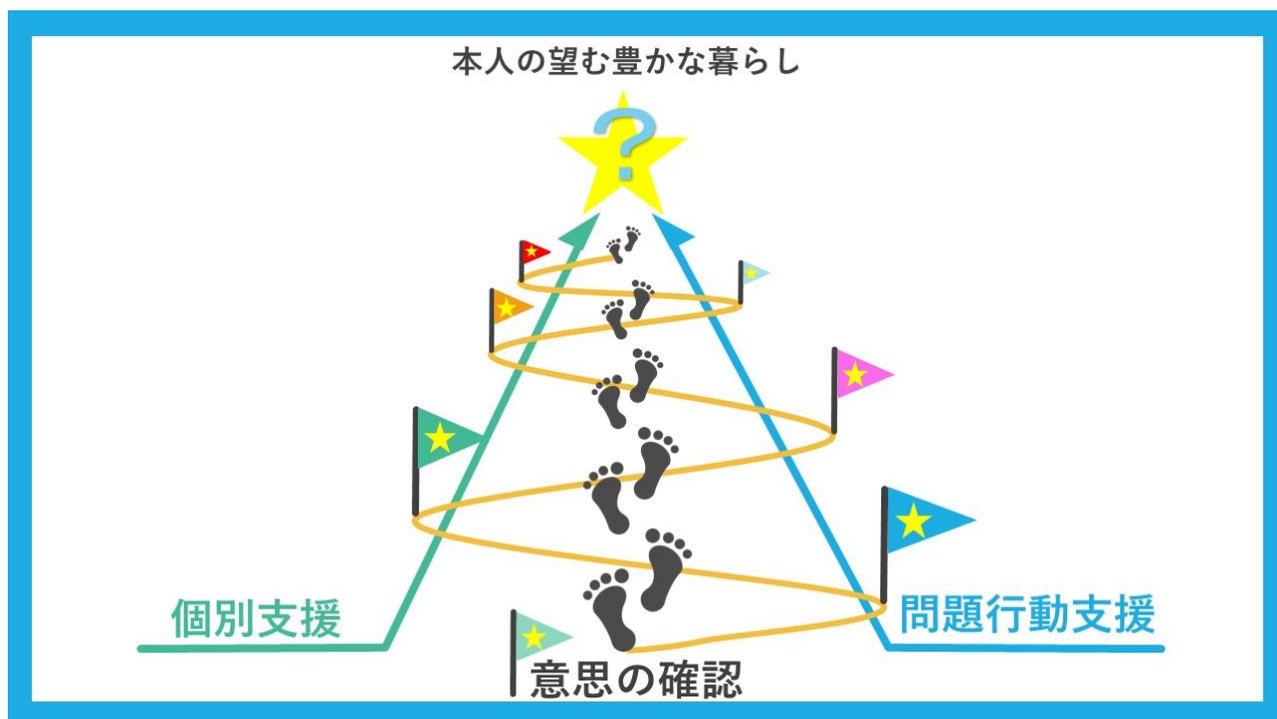
↑お友達との  
野球観戦



←グループホーム  
体験利用

## 6. まとめ

意思決定支援の話をする場合に、よく「ウチは個別支援を行っているから」や「課題行動への支援を行っているから」と言って、意思決定支援なんて改められないよ。といった意見が聞かれる。このような場合、個別支援や課題行動への支援が本人の望む暮らしの実現に向かっている支援であれば、改めて意思決定支援なんてしなくても良いのだと個人的には考えるが、現在世界的に問われているのはそういった従来の支援が本当に本人の意思において望む暮らしの実現に向かっているのかが問われているのだと思う。意思決定支援とは従来の支援にとって代わるものではなく、支援にチェック機能を持たせるものだと考える。



そして世界的に問われている意思決定支援ではあるが、現場の支援者にとっては大きな負担と捉えられてしまっているのも事実である。なぜ負担に捉えられてしまうのかは、様々な〇〇しなければならないことや、意思決定支援という漠然とした言葉に起因しているのではないかと考察する。

## 意思決定支援というコトバ



最後に SDM-Japan からプロジェクトで学んだことのポイントとして、「これをすれば意思決定支援である。」とか「これをすれば意思決定支援である。」といった明確な答えなどは存在せず、大切なことは支援者がご本人に対し、興味関心を持って関わり続ける。そして、その関わりの目的はご本人らしい豊かな暮らしの実現のためであるということである。

最後に、上記に記した大切なこととは、支援者にとって何か目新しい価値観であるだろうか？支援の経験があれば一度ならずとも先輩支援者から聞かされ、実践してきたことではないだろうか？

支援の現場において、支援者が行っている支援を振り返った時に「意思決定支援だったのだ」と思うことが増えていけば、もう少し意思決定支援の捉え方が変わっていくのだと考える。

